日本の説話

4

中世 II

市古貞次・大島建彦編

東京美術

検印省略

日本の説話

第4巻　中世Ⅱ

定価一、六〇〇円

昭和四十九年五月二十日　印刷
昭和四十九年六月　五日　発行

編者　市古貞次
　　大島建彦

発行者　佐々藤雄

発行所　東京美術

東京都千代田区神田司町二ノ七
電話二九二・三二三一(大代表)
振替東京一三一八六　一九七四©

印刷／東京美術
製本／美成社

落丁・乱丁はお取替致します。

0393—0140—5167

目次

説話文学のゆくえ　市古貞次　1
和歌説話の系譜　久保田淳　17
故実説話の系譜　山中裕　39
民間説話の系譜　大島建彦　62
物語草子と説話文学　藤井隆　96
軍記物と説話文学　水原一　125
謡曲狂言と説話文学　北川忠彦　152
歌論書と説話文学
——『俊頼髄脳』の説話の伝承をめぐって——　野口博久　177
古典注釈と説話文学　寺本直彦　200
唐物語・蒙求和歌の世界　池田利夫　231

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今物語・世継物語の世界　河内山清彦　260
宇治拾遺物語の世界　春田宣　289
古事談・続古事談の世界　簗瀬一雄　323
十訓抄の世界　永積安明　352
古今著聞集の世界　大森志郎　383
吉野拾遺と東斎随筆の世界　小泉弘　401
奇異雑談集の世界　吉田幸一　439

説話文学のゆくえ

市古貞次

鎌倉時代から室町時代へ　鎌倉時代は、説話集の編纂が最も盛んに行われた時期であったが、室町時代にはいると、それがほとんど見られなくなる。南北朝時代には『神道集』や『吉野拾遺』が出ており、室町前期には『三国伝記』が書かれている。中期には、一条兼良の『東斎随筆』があるが、これが中世最後の説話集ということができよう。この書は、兼良の名声によって、後代にも尊重され、一般に流布したらしい。江戸時代前期の知識人であった福住道祐は、その蔵書目録（貞享元年自序）に、『古事談』『続古事談』『十訓抄』『古今著聞集』に並べて『東斎随筆』を掲げ、「已上五部ハ公家ノ故実法式等書之」と注記している。そこに収められた説話の大半は在来の説話集、たとえば『古今著聞集』等から抜抄し、編成を改めた類が多く、内容的には特筆するものが少ない。道祐の記しているように公家の故実法式などの参考書としての性格が強いというべきだろう。『群書一

覧』に「本朝にて随筆を号するもの、此書をはじめとす」とあるように、随筆を書名に用いたごく初期の書であり、江戸時代に頻出した「……随筆」と名づけた考証随筆類の先駆をなしたという点に、むしろ本書の意義が認められるように思う。

こうして説話集の類は徐々に姿を消して行ったが、それには鎌倉時代と室町時代との文学を含めての情勢の違いがかかわっている。鎌倉時代は武家の時代ではあっても、公家が依然として文化・文芸の主導権をにぎっていた。衰退期の公家は、自分たちの祖先の築いた文化伝統を保持し、これによりかかったのであって、有職故実の学問が盛んに行われると共に、前代の和歌の収集がしきりに試みられた。そういう懐古思想の一環として、故実・逸話を集めた説話集が編纂されたのである。一方この時期は新旧仏教がすこぶる活気を帯びて活動した時代であって、布教、自宗鼓吹のために種々の法語や和讃などの仏教文学が作られているが、同様な目的も加わって、仏教・信仰に関する諸説話が集められている。いわゆる仏教説話集であるが、それには説教のための材料という意味をもったものが少なくないこと周知の通りである。

これに対して室町時代は、後退しつつあった公家が、南北朝の動乱を経て権威を失った時代であった。九〇〇年以来続いた「勅撰和歌集」も前期に姿を消し、歌の家も影が薄れ、歌僧や武家歌人の活躍が目立っている。物語文学も短編の物語草子に移行するというように、公家の無気力、これに伴うかれらの文学の衰退があらわであるが、そういう時代には、ひたすら公家の文学遺産へのあこがれが

あるだけで、もはや新しい和歌の編集事業もなく、説話の集成も試みられないのである。一方、仏教も鎌倉時代に築いた勢力を維持することに主力が注がれ、高僧の現れることも前代に比してはるかに少ないといわざるを得ない。布教に対する情熱はあっても、むしろ惰性的・慣習的におちいって行ったのではないかと想像される。そのような状勢のもとには、新しい仏教説話集も生まれて来ないであろう。

以上のようなわけで、室町時代は説話集の歴史の上では末期に属すると一往いえるであろうが、しかし説話の蒐集・編成に代って、種々のジャンルの文学の中に入りこみ、あるいはそれぞれの説話を中心として、独立した読み物が作られるようになったことを、看過してはならない。

共同制作から個人の文芸へ

説話はもともとある人間の行動や事件についての伝聞などを語り伝え、あるいは書きとめたものである。その内容は種々雑多であるが、何らかの意味で、人々の興味を起させるような異常な話材を伝えた、分量の短い、簡単な話であるのがふつうであり、個人的な感情を伴わないものである。つまり説話は不特定多数の所産であって、個人の創作にかかるものではない。語り伝え、書きつぐうちに、多少表現が変えられてゆくことはあっても、故意に改められることはほとんどない。

なおそのような説話を集めることは、自らの嗜好なり興味なりに基くことはもちろんであるが、またそういう説話集によって、過去の故事・逸話を知る、言いかえると祖先の人々の智恵と経験とを知

り、教養の資とするという意味あいもこめられていた。したがって人々を教導するためにも適当な話の種でもあったわけである。

けれども説話は前述のように、誰かが語った所をなるべくその通りに伝えるものであって、自分の思うままに自由に変改することはゆるされない。それを行ったときは、説話の域を脱出してしまうのである。それ故、説話は個人の創造ではない、民間の文学なのであるが、やがてそういう説話をもとにして、これを敷衍し潤色し、あるいは意識的に改めて、説話集等の説話とは違った読み物を作るということも起って然るべきであった。共同制作の文芸から個人の文芸へという方向である。説話集の場合にも、その取捨選択にわずかに編者の自由と個性が認められたのであるが、それとは異なった、個々の説話に関する加筆修飾である。古く『竹取物語』が民間に語られた説話を材料として作られたらしいことは、先人が指摘しているところであるが、説話と物語とはすこぶる微妙な関係にあって、物語作者の創造性を究め得ない場合も少なくない。だがとにかく説話は説話としての形を保ち、口承あるいは書承によって伝えられる一方、その説話に多少の改変を加えて、一つの読み物、短編の読み物、草子を作ることが、説話文学・説話集の最盛期を過ぎた南北朝以降に目立って行われるようになったのである。

そのような傾向の芽ばえは、説話集自体の中にも見られるのではなかろうか。室町時代の前期に編集された『三国伝記』は、書名の示す通り梵・漢・和三国の伝記的説話を主として収めたものである

が、梵・漢については、漢語の多い硬い文章で表現され、仏典や漢籍などから取材した例が多く、原典を縮訳しながら相当忠実にうつした場合もかなりあるのではないかと推測される。和に関する部分は、古代の高僧の伝記や仏教説話・霊験談が多いが、それも前代の諸文献・説話集などから引いたものが大半を占めている。そういうことから見れば、いかにも典型的な説話集だといえるが、そういう中で、和については、編成した時期に近い南北朝時代の説話がはいっていることが珍らしい。そればかりではなく、説話の常識を破った表現がしばしば見られることが注目されるのである。

本書の巻第三の最後に、大江景宗が恋歌を詠む話がある。景宗がある身分の高い女性に思いを寄せ、長谷観音に参詣して所願成就を祈念するうち、偶然その女性のめのと子にめぐり会い、仲介を依頼する。そして女性の出した難題の歌を首尾よく詠んで思いを遂げたというのである。そのはじめに景宗が

其品高キ女ニ心ヲ懸ケ、月日ヲ送レドモ、詞ヲサヘ伝、心ノ色ヲ知ルベキ身ニモアラネバ、ツヽムニ似タル独リ寝ノ、カベニ背ケル燭ノ、イツマデ草ノイツトナク、人シレズ泣キ居タリ。カクテ死シナバ其ムクヒ、後ノ罪サヘ悲シクテ、人故惜キ命ノ末、イカヾワセント思ヒツヽ、

長谷に参詣して祈る。また、めのと子が景宗に女の両親が世を去って今はかすかな有様である旨を語った後、次のように述べている。

サレバトテ又我御品ヲヤツシテ、哀レ浮世ノウキ沈ハ、身ヲウキ草ノ根ヲ断ヘテ、サソウ風アラ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

バイナントマデ、思食スベキニ非ネバ、今マデサルベキ世スガモ無クテ、ヤモメ烏ノ暁ノ声ニ副ヘタル鐘ノ響、ツク〳〵ト、御盛過ギナムモ糸惜ク御心苦フ思ヒ奉ル

といっている。もちろん説話にも感情をこめた修飾的なことばが無いわけではなく、説話の本質からして、あるものには擬態語や擬音語が多いとはよくいわれているが、このような例は少ない。後文では、古訳古文を引き、あるいは慣用句をとりこんで文を飾っており、前者も同様ながら七五調を基本においた文であることが注目される。こういう記述は、軍記物語の、たとえば『太平記』などの方法とも関係がありそうである。

また巻第四の「三人同道僧俗愛智川洪水ヲ渡ル事」は尾張の時衆念仏者が上京の途次、美濃の真言の律僧と道づれになり、旅を続けるうち、近江の俗、水船某も加わり、それぞれの方法で水かさをました愛智川を渡ったという話である。途中で俗の懺悔話もあって『三人法師』の構成ともある点で近似しているが、はじめの二人が道づれになって行くところに、

後ニ成リ前ニ成リテ行ク程ニ、始メテ今ハ近江路ニ、誰宿ヲモ柏原、本ノ心ヲ今迄ニ、捨ヌ身ナラバ憂ラマシ。浮世ノ夢モサメガイニ、若キヤ沈マン磨針ノ、行ク末細キ小野ノ道、問ヘドモ答ヘヌイサヤ川、今日モ暮ヌト夕暮ノ、珠ヲ懸タル旅衣、片敷床ノ山隠ニ、鴨ヤ千鳥ノ岡越テ、馬屋ノ原ヲ過ギケルニ

と、『平家物語』『太平記』その他にあるような道行文を挿んでいるところが、珍らしい。続いて描

かれる第三の男、近江の俗は、

年ノ齢四十計ナル男ノ、長高頸短ク、ツボ笠引籠タリケルガ、目ツボクサリテ猿眼、額アガリテ鳴鼻ナルガ、小鬢ハゲテ色黒ク、ホウ骨イカリテヒゲ赤ク、頤ソリ向フ歯指シ出タリケルガ、緑ノ林ニ草鹿書タル櫨染ノ小袖ノ垢付タルニ、白浪ニ帆懸舟付タル栂クシノスワウノ破レタルヲ着テ、袴スソ鶴脛ニ脚半ノハヅレワニ足ニ歩ミナシ、小節巻ノ弓ノ拳太ナルヲ肩ニカツギ、塗ウツホノ細長ナルニ、大鴈俣少々指コミテ腰ニ付ケ、輪宝鍔ノ太刀カモメ尻ニ帯、竭摩目貫ノ刀鯰尾ニ指タルガ

と約百二十字を費して記している。こういうことは、在来の説話集に類を見ないところである。人間の姿、服装などをこまかく記すのは、物語文学の主人公に見られるところであり、軍記物語でもしばしば勇士の姿や武具などが精写されていたが、ここでも姿態・装束などを具さに写している点、甚だ特筆すべきものであった。

このような例は、なお、巻第四「尾州成清子息遁世往生ノ事」、巻第五「兜率僧正事」「痴女石山寺詣テ物言ノ事」、巻第七「天台座主延昌僧正ノ事」、巻第十二「富士山ノ事」などにも見られるものであるが、編者が説話を記しながら、自分の好みによって修飾していったと考えるべきであろう。

これまで述べて来たように、『三国伝記』の日本に関する部分には、従来の説話集のあり方からはみ出したものが見られるのであって、むしろそのような各話がそれぞれ一つの作品として独立してゆ

く可能性を示唆しているものというべきである。

軍記物語の説話の意義

説話は、鎌倉時代の軍記物語に挿入されていた。もちろん軍記物語はある一時期の歴史と戦争とを描いた語り物であるが、その本筋の記述の間に、さまざまな説話を組みこんでいる。たとえば源頼政の戦死を遂げたことを記したあとに、かれがどんなに文武両道にわたって秀でていたかということを「鵺」という一章を費して記しており、そこには怪鳥退治と当意即妙の付け句より成る逸話が二個収められている。（ただしこの二話は似通っているためにくどい気がしないでもない。根は同じで、時・所を違えた二話になって伝承されたのを、二つながら収めたのであろう。）

このように主要人物の死の後に生前の逸話を記すのは、『平家物語』の常套手段である。歴史を描くに当って、紀伝体と編年体とを併せ用いたものともいえるが、そうでない例もしばしば見受けられる。巻五「朝敵揃」は、頼朝挙兵の報が福原へ早馬を以て注進される「早馬」に続く章段であるが、そこでは、朝敵のはじまりから説き起して、朝敵の名を列挙し、

この世にこそ王位も無下にかるけれ。昔は宣旨をむかつてよみければ、枯れたる草木も花咲き実なり、とぶ鳥もしたがひけり。

として、五位鷺の由来を記している。そして「又先蹤を異国に尋ぬるに」として燕の太子丹の説話を記している。こういうふうに折にふれて故事来歴を語る傾向は、『源平盛衰記』その他にも見られるのであるが、それは南北朝以後に至って、いっそう甚だしい。『太平記』にも種々の説話や中国の故

事が多く挿まれているが、特に著しいのは准軍記物語とよばれる『曽我物語』であった。同書には、牽牛織女の事、酒の事、眉間尺の事、貞女の事、巣父許由の事、呉越の戦などがあり、「たとへは少し違ふやうなれど」などと断った上で、故事・説話を得々として述べ立てるのである。巻五「五郎が情をかけし女出家の事」に、

さる程に皆人よく聞きたまへ。……されば花に鳴く鶯、水に住む蛙だにも、歌をばよむぞかし、いはんや人としていかでかこれをはぢざるべきとて、この歌をよみける……

として、鶯と蛙が和歌を作った話をあげている。大和国の僧が、弟子を先立てて嘆いていたところ、翌年の春、寺の軒端で鶯が「初陽毎朝来、不相還本栖」と鳴く。その声を文字に書いて見ると、「初陽の朝毎には来たれどもあはでぞ還る本の栖に」という歌である。また紀良貞が住吉で女に会い、程経て行くと女は居ない。蛙が浜を通るあとを見ると歌になっていたというのである。これは毘沙門堂本『古今集註』や謡曲「白楽天」やのちの「火桶の草紙」にも記されている有名な和歌説話であった。軍記物語等の作者はこうして機会のある毎に説話を織りこんでいる。これは作者が博識を誇示する気持ちがあったことにもよっていようが、一面啓蒙的な意図からも出ていたと思われる。作者の説話好きを示すものであったが、読者もまたそのような種々の話を好み、そうして教養の資にもしたのであろう。いずれにしても、説話のみを集めるということがだんだんすたれて軍記物語の変貌に大きな役割りを果していたことを、今後もっと考究する必要があるように思う。

『徒然草』への流入

また日本の随筆文学の代表作として知られる『徒然草』にも説話の流入が行われている。『徒然草』は『十訓抄』のように系統立った教訓的主題によって統一されてはいないが、兼好の念頭には、『十訓抄』がちらついていたのではないかと思われる節がある。少なくとも『十訓抄』のようなものから転化して書かれたと推察される段が、かなり見られると思う。

『徒然草』第百八十八段に「一事をかならず成さんと思はば、他の事の破るるをもいたむべからず。人のあざけりをも恥づべからず。万事にかへずしては、一の大事成るべからず」として「ますほの薄」の例話をあげている。雨の日、「ますほの薄」はどんなすすきか知っている渡辺の聖がいると聞いて、その座にいた登蓮法師は、人々が雨がやんでからにしてはと止めたが、「人の命は、雨の晴れ間をも待つものかは」といって出かけて習ったというのである。この登蓮の話は鴨長明の『無名抄』に出ており、兼好はそれから取材したのであろう。『無名抄』は歌論書であるが、また和歌説話を集めたものとも見られる作品である。長明は、その歌道に熱心なことを感じて記しているのであるが、登蓮は、その習い覚えたことを「いみじう秘蔵しけり」「この事、第三代の弟子にて伝へ習ひ侍るなり。此薄、同じさまにてあまた侍り」として以下ますほ・まそを・ますの差別などを記したのち「和歌の習ひ、かやうの古事を用ゐるも又世の常の事也。人周く知らず。みだりに説くべからず」とあり、秘伝思想が見られるのに対して、『徒然草』では、人々の一時の懈怠が一生の懈怠となるのを戒めたのちに、この話を引用し、終りに「このすすきをいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁を

ぞ思ふべかりける」と文を結んでいる。そういうところに、兼好の説教者としての巧みさがあり、説話を単なる説話として放置せず、自己の論旨に引き入れている。こういうことは、『沙石集』などに見られるところであるが、説教のための話材としてはっきり掲げるのではなく、論を進めながら、自然に説話を利用しているところが、すこぶる巧妙である。

物語草子への発展
——説話の活力

説話文学はこのように軍記物語や随筆文学へ流れ入ったが、なお室町時代には、単独の物語草子として現れるようになった。南北朝時代に成立し、安居院の説経唱導の種本だといわれている『神道集』の説話と関係のある物語草子には次のようなものがあった。

第六　熊野権現事——熊野の本地
第七　二所権現事——伊豆箱根の本地・笹根権現縁起
第十二　祇園大明神事——祇園の本地・牛頭天王御縁起
第十七　諏訪大明神秋山祭事——田村の草子
第十八　諏訪大明神五月会事——青葉の笛物語・戸隠山絵詞
第三十三　三島大明神事——みしま
第三十四　上野国児持山事——源蔵人物語・浅間御本地由来記
第四十　上野国勢多郡鎮守赤城大明神事——上野国赤城山本地
第四十四　鏡宮事——鏡男絵巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com